

第 1 期土佐清水ジオパーク基本計画

土佐清水ジオパーク推進協議会

2022 年 4 月 15 日 策定

目 次

1 計画策定にあたって	1
1-1 ジオパークとはなにか	1
(1) ジオパークとは.....	1
(2) ジオパークの歴史.....	1
(3) 「大地の遺産」はなぜ大切なのか	2
(4) ジオパークをより理解するためのキーワード	3
1-3 これまでの経緯.....	5
1-4 計画の位置づけ.....	6
1-5 計画の期間.....	6
2 ジオパークとしての価値	7
2-1 土佐清水ジオパークの地質的価値	7
(1) 土佐清水ジオパークの大地.....	7
(2) 土佐清水ジオパークの地質的特性	8
2-2 テーマとストーリー	10
黒潮と文化の伝来.....	10
清水さばを育む海底地形.....	11
黒潮と大地が育むサンゴの海.....	11
自然災害と暮らし.....	11
2-3 ジオサイトの整理	12
3 土佐清水ジオパークの目的	13
3-1 なぜジオパークを進めるのか	13
3-2 土佐清水ジオパークの目的と理念	15
3-3 土佐清水ジオパークの基本方針	18
3-4 地域と住民とジオパークとのつながり	17
4 計画の体系.....	18
4-1 取組の体系	20
5 計画を進めるために	23
5-1 ジオパークの推進体制	23
(1) 協議会	23
(2) 専門部会	23

(3) 顧問、学術アドバイザーおよび協力機関	23
5-2 各主体の役割	24
(1) 住民の役割	24
(2) ジオガイドの役割	24
(3) 事業者の役割	24
(4) 教育機関の役割	24
(5) NPO 等各種団体の役割	25
(6) 研究機関の役割	25
(7) 行政の役割	25
(8) 協議会の役割	25
5-3 アクションプラン	26

1 計画策定にあたって

2021年9月、土佐清水ジオパークが日本ジオパークに認定されました。これから、さらにジオパーク活動を推進し、地球に寄り添った持続可能な地域社会を実現していくため、「土佐清水ジオパーク基本計画」を策定します。まず、計画の策定にあたって、はじめにジオパークとはどういうもので、なぜ土佐清水においてジオパークを進めるのかを明確にします。そのうえで、日本ジオパークおよび土佐清水における経緯、本計画の位置づけなどを示します。

1-1 ジオパークとはなにか



(1) ジオパークとは

景観や地質・地形は、惑星地球の進化や私たち人間の歴史の重要な証人であり、将来の持続可能な発展のために必要な人類共通の資産でもあります。ジオパークとは、地域の人々の主体的な活動による地質学的に重要な場所や景観など「大地の遺産」の一体的な保全と活用を通じて、私たちが暮らす生きている惑星「地球」への理解や意識を高めることで、地域や社会全体の持続可能な発展を目指す世界的なプログラムです。また、そのプログラムを取り入れ、「大地の遺産」を大切にしながら、地球とともに生きる地域のことを指します。

(2) ジオパークの歴史

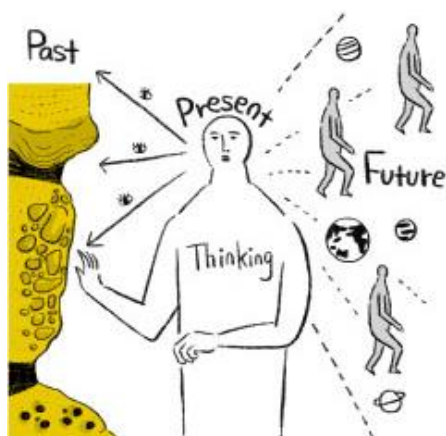
ジオパークの概念は1990年代半ばにヨーロッパの地質学者たちによって提唱されました。地球科学的に重要な遺産を保全し、教育や地域の持続可能な発展に活用する取り組みは世界中に広がっていきました。2004年に世界ジオパークネットワークが設立され、2015年には、ジオパークは、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の正式なプログラムになりました。日本においてジオパークの活動は2008年から活動がはじまり、2022年3月現在、日本ジオパークは46地域あり、この内9地域がユネスコ世界ジオパークです。

ジオパークの年表

時期	経緯
1990 年代半ば	・ヨーロッパの地質学者たちによってジオパークの概念が提唱される
2000 年	・ヨーロッパジオパークネットワークが発足
2001 年	・ヨーロッパジオパークネットワークとユネスコが提携
2004 年	・世界ジオパークネットワークが発足
2007 年	・日本ジオパーク連絡協議会が発足し、翌年、日本ジオパークネットワークに発展
2015 年	・ジオパークがユネスコの正式プログラムに昇格

(3) 「大地の遺産」はなぜ大切なのか

地球の活動がつくりだした地質・地形といった遺産は私たちが暮らす惑星「地球」の歴史を教えてくれるものであり、私たち人間の営みの土台となっているものです。私たちが生活する地球のことを知ることは、将来にわたって地球でよりよく生きていくために必要なことです。ジオパークの根幹となる「大地の遺産」を大切にすべき理由を以下にまとめます。



地球の記憶は未来への道しるべ

地球は、生きている惑星であり、大地の変動や人間の営みの影響によって絶え間なく変化を続けています。地質や地形には、かつて地球環境がどのように変化してきたかという情報が残されています。大地に残されたメッセージを読み取り、そこから地球の未来を想像することは、将来にわたって地球で生活をするうえでの大切なヒントとなります。

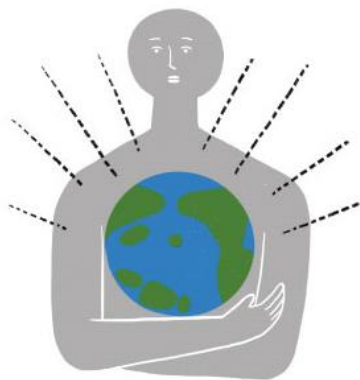
大地の物語を感じよう

地球の営みによってできた大地は、豊かな生態系や私たち人間の暮らしの礎です。私たちを取り囲む様々なものが大地に根差し、相互に関わりながら、地域ごとに独自の景観や文化をつくりだしてきました。大地との関係性を理解することは、それぞれの地域の「らしさ」を守り、多様性のある世界を築くことにつながります。



大地が教えてくれる未来をつくる思考方法

大地の遺産を通じて、地域や地球そのものへの理解を深めることは、多角的なものごとの見方や時間や空間を超えた思考方法を身に付けることの一助になります。これらの技術や地球目線の価値観を身に付けた人材は、地域や社会の持続可能な発展のために大きな役割を果たすことになるでしょう。



(4) ジオパークをより理解するためのキーワード

前述したように、世界ジオパークはユネスコの正式プログラムとなっており、「世界ジオパークガイドライン (UGGp ガイドライン)」に沿って進められています。土佐清水においても、このガイドラインに沿った取り組みが求められています。そのうえで必要となるキーワードについて以下に説明します。

ユネスコとは

ユネスコとは、国際連合教育科学文化機関のことです。英語で表わすと United Nations (国連) Educational (教育の), Scientific (科学の) and Cultural (文化の) Organization (機関) で、それぞれの頭文字をとって“UNESCO”となります。ユネスコ憲章の前文には、主に次のような内容が書かれており、ユネスコの理念や精神が述べられています。

- ・戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。相互の風習や生活を知らないことは、人民の間に疑惑と不信をおこし、その不一致がしばしば戦争となった。
 - ・文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育は、神聖な義務である。
 - ・政治的及び経済的な取り決めのみに基く平和は永続する支持を確保できる平和ではなく、平和が失われないためには、人類の知的及び精神的連帯の上に築かれなければならない。
 - ・世界の人々の教育・科学及び文化上の関係を通じて、国際連合の設立の目的である国際平和と人類共通の福祉という目的を推し進めるために、ユネスコを創設する。
- (ユネスコ憲章前文より抜粋)

ジオパークはユネスコのプログラムであり、この理念の下で活動します。ジオパーク活動は、国際平和と人類共通の福祉という普遍的な目的につながっています。

持続可能な発展とは

ジオパークを進めるうえでの大切な理念に「持続可能な発展¹」があります。様々な場面で使われている言葉ですが、その概念は少しわかりにくいかもしれません。その考え方は、「持続可能な発展」は将来の世代のニーズを満たしつつ、現在の世代のニーズを満足させるような社会づくりのことを指すものです。環境の保全と経済の発展、社会の発展、これらの要素を互いに負荷をかけず、調和を保ちながら充実した状態を将来にわたって、維持し、発展させていくものです。

1987年の国連の「環境と開発に関する世界委員会」（通称：ブルントラント委員会）の報告書で、初めて提唱されました。当初は、環境問題からスタートしたものでしたが、現在では、貧困や平和、人権、ジェンダー、保健・衛生などあらゆる分野において、将来の世代のニーズに配慮しながら、地球規模の問題解決を行うことが必要と考えられています。

「持続可能な発展」は誰にとっても平和で安定した社会を築くこと、そして、将来の世代にもそれが続いていくような社会を作っていくという、世界の人々にとって普遍的な理想を目指すものです。そのための世界共通の目標として、「持続可能な開発目標（SDGs）」が2015年の国連サミットで採択されました。SDGsは、国際社会だけでなく、地域や民間企業、そして個人、とあらゆるレベルでの行動が求められており、土佐清水ジオパークでもSDGsの目標に寄与する活動を推進していきます。

¹ Sustainable Development を「持続可能な開発」と訳すことも多いですが、ここでは「持続可能な発展」と訳しています。

※計画文の中でいう「持続可能な発展」の意味合いは、ここで記しているように地域だけの発展ではなく、国際的な課題解決も行いながら、よりよい社会を作っていくことも含まれています。

1-2 これまでの経緯

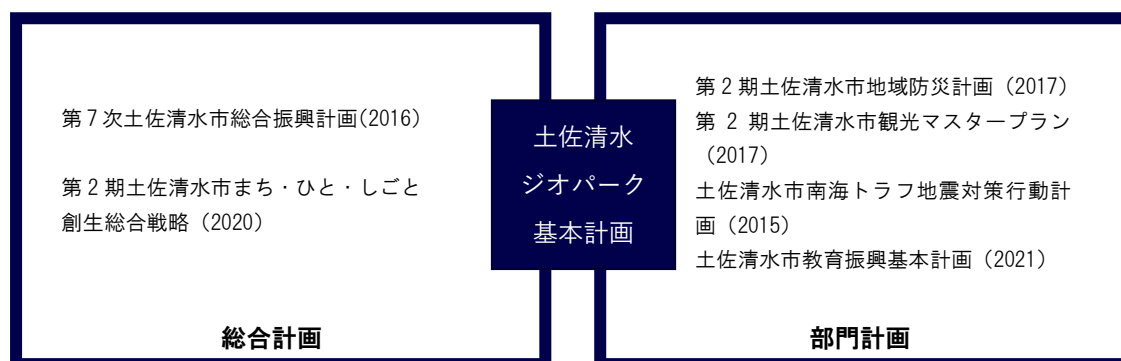
日本においては2008年にジオパークの活動が始まりました。土佐清水では、2012年頃、観光入込客数の減少等に危機感を募らせた観光事業者等から「ジオパークを目指してはどうか」という声がありはじめました。そして、2014年に日本ジオパークの認定を目指して土佐清水市観光商工課内にジオパーク推進係が設置されました。2015年には「土佐清水ジオパーク推進協議会」が設立され、様々な関係主体が協働連携してジオパーク活動を推進しています。日本ジオパークネットワークには2014年から準会員として参加し、2017年、2018年と正会員を目指し、申請を行いましたが、認定は見送られました。その後、課題解決を進め、2020年3月にはジオパークの拠点施設でもある「足摺宇和海国立公園 竜串ビジターセンターうみのわ」がオープンするなど、活動の幅を広げながら、ジオパーク活動を少しずつ土佐清水に根付かせてきました。2021年4月に、3度目の申請を行い、同年9月25日に日本ジオパークに認定されました。

土佐清水ジオパークの経緯

時期	経緯
2007年	・[12月] 日本ジオパーク連絡協議会設立（13地域：地域団体）
2008年	・[5月] 日本ジオパーク委員会（JGC）発足（審査団体）
2009年	・[5月] 日本ジオパークネットワーク（JGN）設立（日本ジオパーク連絡協議会は発展的解散）
2010年	・[8月] 特定非営利活動法人日本ジオパークネットワーク設立。第1回 JGN 全国大会開催
2014年	・[4月] 土佐清水市産業振興課内にジオパーク推進係が設置される ・[5月] 日本ジオパークネットワーク準会員となる
2015年	・[2月] 土佐清水ジオパーク推進協議会設立 ・[4月] 土佐清水市観光商工課内にジオパーク推進室が設置される（昇格） ・[11月] 世界ジオパークがユネスコの正式事業として認定
2016年	・[4月] 土佐清水ジオパーク構想推進計画策定 土佐清水ジオパーク構想ジオサイト保全整備計画策定
2017年	・[4月] 日本ジオパークへ加盟申請 ・[6月] 土佐清水ジオパーク構想の2017年の認定見送りが決定 ・[7月] 土佐清水認定ジオガイドの会、発足準備
2018年	・[3月] 土佐清水ジオパーク構想基本計画策定 ・[4月] 日本ジオパークへ加盟申請 ・[7月] 現地審査 ・[9月] 土佐清水ジオパーク構想の2018年の認定見送りが決定
2019年	・[3月] 2019年の日本ジオパークへの申請見送りを総会で決定
2020年	・[1月] 国立公園*ジオパーク推進課が設置され、事務所が竜串ビジターセンターに移転 ・[3月] 足摺宇和海国立公園竜串ビジターセンターがオープン ・[4月] 2020年の日本ジオパークへの申請見送りを総会で決定
2021年	・[4月] 3度目の日本ジオパーク認定申請を行う ・[8月] 現地調査 ・[9月25日] 土佐清水ジオパークが日本ジオパークに認定される

1-3 計画の位置づけ

本計画は、土佐清水ジオパークの推進に係る最上位計画として位置づけます。本計画は協議会が策定するものですが、ジオパークの推進は土佐清水市の政策としても重要な位置づけにあります。したがって、本計画は土佐清水市の総合計画および関連部門計画との整合を図りながら進めていくこととします。



また、ジオパークの活動はユネスコプログラムでもある世界ジオパークの活動に準拠していることから、世界ジオパーク作業指針や国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」などとも整合性を図り、共通の理念に向かって進めるものです。

1-4 計画の期間

本計画は、土佐清水ジオパークの目指す姿を明らかにし、それに向けた取り組みの方向性を示すものです。計画期間は2022年度から2029年度までの8年間とします。

2022年から2025年までの4年を前期計画期間、2026年から2029年までを後期計画期間とし、具体的な数値目標を示したアクションプランを策定していきます。アクションプランでは審査で指摘された項目などに対し、具体的な行動を示し、再審査までに状況の改善を行っていきます。また、地域での活動状況や審査結果などを踏まえ、状況に応じて適宜見直しを行っていきます。

2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029
			認定				再審査				再審査
ジオパーク構想基本計画				第1期ジオパーク基本計画(8ヶ年)							
				前期アクションプラン				後期アクションプラン			

2 ジオパークとしての価値

土佐清水市の大地は、大きく 4 つの時代に形成されました。ここでは、土佐清水の大地の成り立ちや地球科学的な価値を明らかにし、地域固有の歴史・文化などのつながりを楽しみながら学べるテーマやストーリーについて示します。

2-1 土佐清水ジオパークの地質的価値

(1) 土佐清水ジオパークの大地

土佐清水の大地は、大きく以下の 4 つの時代に分けられます。



3800 万年前～ 深い海の記憶

日本列島が、まだユーラシア大陸の端にあった時代、海洋プレートの沈み込みによって深い海の底にたまった砂や泥、火山島の一部が陸側に押し付けられました。こうしてできた地層を付加体といい、日本列島の土台となっています。土佐清水の大地の土台も、約 3800 万年前以降にできた付加体です。そして、プレートの沈み込みは今も続いています。



1700 万年前～ 浅い海の記憶

日本列島が、大陸の端から離れ、現在の位置まで急速に移動していた頃、大地は激しく変動していました。三崎地区に分布する三崎層群は、活発に隆起していた山地から運ばれてきた大量の砂や泥が浅い海や河川に堆積したものです。地震や海底地すべりによって変形した地層が、激動の時代を物語っています。この大地の変動は、当時の生き物にも影響を与えていたと考えられています。



1400 万年前 マグマの記憶

活発な大地の変動は、現在は火山のない太平洋側でマグマの活動を引き起こしました。約 1500 万年前から始まったこのマグマ活動は大地を盛り上げ、太平洋に向かって突き出す岬のもととなる地形を作ったとも言われています。足摺岬の花崗岩は、マグマの活動も終わる頃の 1300 万年前にマグマが地下深くで冷えて固まったもので、その後も続く大地の隆起によって、現在は地表に顔を出しています。



～現在 暮らしと大地の営み

土佐清水は、現在もプレートの沈み込みによる変動や、堆積、風化・侵食といった大地の営みが活発な場所です。こうして生まれた地質や地形は黒潮と出会うことで、豊かな漁場、人や文化を運ぶ海流、そして温暖湿潤な気候といった恵みを土佐清水にもたらし、独自の暮らしや文化を育んできました。

（２）土佐清水ジオパークの地質的特性

土佐清水の地質学的特徴は日本海拡大期の前弧域（海溝側）で生じていた、きわめて活発な大地の変動を記録する地質体が存在することです。

４つのプレートのせめぎあう、世界有数の地震・火山大国として知られる日本列島。しかし、日本海が急速に拡大し、ユーラシア大陸から切り離された時代の日本列島は、現在よりもはるかに大地の変動が活発だったと考えられます。土佐清水に分布する三崎層群と足摺岬花崗岩体は、日本列島の形成史の中で最も重要な事件の一つである日本海拡大が、その最前線であった日本海沿岸地域以外にどのような影響を与えたかを知ることができる重要な地質体です。

① 三崎層群に見られる地層

竜串海岸に代表される三崎層群では、日本海拡大期の活発な大地の変動の影響を受けた海底やそこに棲息した生物の様子などに触れることができます。三崎層群は、日本海拡大にともない、西南日本が急速に回転移動をしていたとされる約 1700 万年前に堆積しはじめた浅い海から川にかけての地層が、付加体である清水層を不整合に覆っています。三崎層群には、地震にともない海底地すべりや液状化現象によって変形した地層や、津波によってできたと考えられる堆積物が数多く含まれており、当時の活発な地殻変動を物語っています。また、保存状態はいいものの、多様性の低い密度の小さい生痕化石群集が見られるのも三崎層群の大きな特徴の一つで、これは、四国山地周辺における断層運動や花崗岩マグマの上昇にともなう隆起によって多量の碎屑物（風化侵食によって細かく砕けた礫、砂、泥など）が生産され、前弧海盆（海溝に堆積した土砂がプレートの沈み込みによって陸側に押し付けられた結果、陸から運ばれてくる土砂をせき止める高まりが形成されることでできた海底の盆地）に供給された結果であると考えられています。土佐清水では、三崎層群がよく露出している松崎・落窪海岸、千尋岬、竜串海岸、弁天島、爪白海岸といった地質・地形サイトにおいて、活発な地殻変動の影響を受けながら前弧海盆が埋め立てられていく過程を追うことができます。そのため、安定大陸（先カンブリア時代に造山運動を受けたが、それ以降は造山運動がなく安定している地域）と比べて研究が進んでいない日本列島のような変動帯における古環境や古生態のモデル地として注目されています。また、日本海拡大期の地下深部でのマグマの形成などの火成活動や地殻変動の詳細を知る手がかりが三崎層群に力や熱の痕跡として残されている可能性もあり、そういった分野からの研究も進められています。

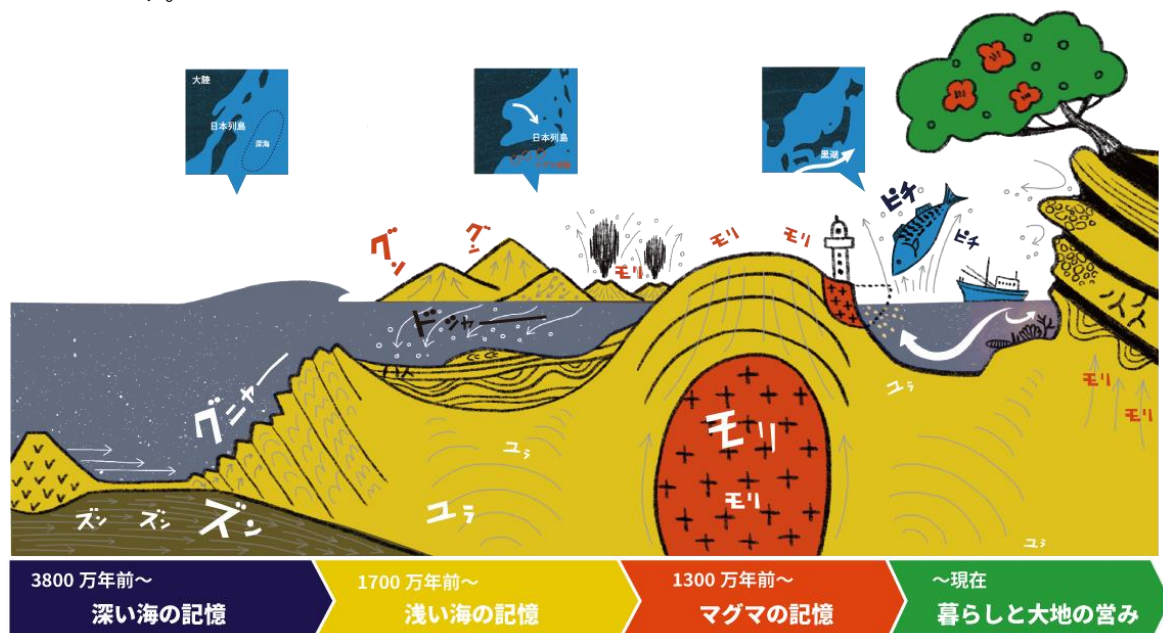
② 足摺岬花崗岩体

一方、足摺岬花崗岩体では、日本海の拡大に関連したマグマの活動の証拠を通じて、地下深部の環境に触れることができます。足摺岬花崗岩体は、日本海拡大終了直後の約 1600 ～1300 万年前に、西南日本の前弧地域（現在の西日本太平洋側、足摺岬はじめ、紀伊半

島、室戸岬等）に生じた火成活動によって形成された火成岩体の一つです。これらの火成岩体は、若く暖かいフィリピン海プレートが日本海拡大にともなって強制的に沈み込むことで生じたと考えられてきました。近年では、これらの火成岩体の形成によって、日本海の拡大が抑制・停止されたとも考えられています。また、足摺岬や室戸岬、紀伊半島といった太平洋側に突き出す半島地形や、西日本最高峰の石鎚山を含む四国山地は、この時の火成岩体の浮力によって隆起したことで形成されたという説も提唱されており、現在の地形にも大きな影響を与えている可能性があります。

足摺岬花崗岩体は、成分が異なる複数種類の花崗岩が同心円状に分布する様子や、花崗岩マグマの中に何度も玄武岩質マグマが注入されたことでできた様々な構造、清水層が熱を受けることでできたホルンフェルスなど、地下深部のマグマだまりで生じていた現象について知ることができます。その一方で、足摺岬花崗岩は日本のような沈み込み帯ではなく、大陸内部で生じることが多いアルカリに富むAタイプ花崗岩であり、どのように形成されたかはいまだに不明です。また、ここではカリ長石を斜長石の殻が覆う卵型の結晶が特徴的な世界でもっとも若いラパキビ花崗岩も見られます。Aタイプ花崗岩もラパキビ花崗岩も国内では他に報告例がなく、日本で見ることは唯一足摺岬だけです。このような多種多様な岩石からなる足摺岬花崗岩体は、作られてからの経過時間が短く、マグマだまり中で起きた様々な変化が失われずに記録されています。このためマグマ活動の詳細や花崗岩が土台となっている大陸の成り立ち形成の手掛かりが得られる大きな可能性を秘めていて、それゆえに多くの研究者が訪れるまさに地球科学研究の最前線ともいえる場所となっています。

このように、土佐清水では、三崎層群や足摺岬花崗岩体といった日本海拡大の激動の時代に形成された地質体に加えて、それらの地質体の基盤となっている付加体や隆起地形、激しい風化侵食の結果生じた地形など、様々な時空間スケールで変化する大地の様子を見ることができます。変動する日本列島の姿を端的に示すとともに、私たちが暮らす変動帯・日本列島がどのような場所で、どのようなことが起こり得るか、考えることのできる場所です。



土佐清水の大地の成り立ち

※土佐清水の大地は、過去、現在、そして未来が関係性を持って変化し続けている。このイラストでは、想像力をふくませることを重視しており、情報をぶつ切りせず、一体的に表現している。そのため、空間的・時間的な配置が現実と異なる表現もある。

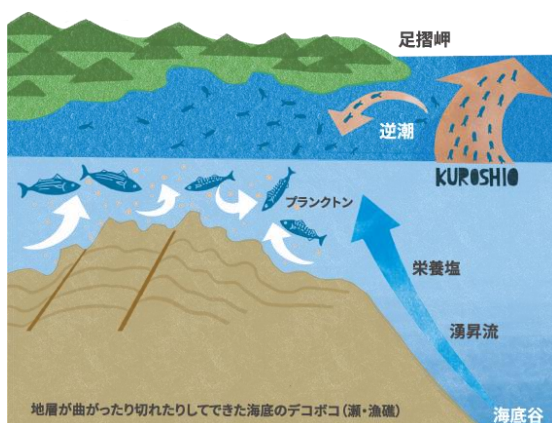
2-2 テーマとストーリー

土佐清水ジオパークでは、黒潮と大地の出会いから、私たちの住むまちの暮らしや歴史を紐解き、海とともにある暮らしを伝えていくため、テーマを「**―黒潮と共に生きる―漁師が生まれる大地の物語**」と設定します。

―黒潮と共に生きる― 漁師が生まれる大地の物語

土佐清水を語るうえで欠かせない要素が海、特に黒潮です。黒潮が大地と出会うことで、土佐清水の生態系、海流、多様な海と共に生きる暮らし、文化が育まれてきました。土佐清水では黒潮と大地の変動と海が影響しあうことで、生活の場そのものも生み出してきました。平地の少ない土佐清水、特に足摺半島地域では、小高い場所にある平坦地である「駄場」が居住地や農耕地として利用されてきました。「駄場」の大部分は海成段丘であり、地震隆起と気候変動にともなう海水準変動によって形成された地形です。つまり、人々の暮らしの根幹に大地と海との相互作用があります。

そして、この土佐清水の海を特徴づけるのが「黒潮」です。この地では、黒潮が大地と出会うことで、生態系、海流、多様な海と共に生きる暮らし、文化が育まれてきました。



図：海底地形と漁場の形成



図：黒潮の反転流

黒潮と文化の伝来

長い歴史を有する日本の出汁文化を支えてきた鰹節や宗田節をはじめとする漁業文化はその好例です。江戸時代の土佐清水は、全国でも屈指の品質を誇る鰹節の産地として知られていました。その技術が現代に引き継がれているのが宗田節です。この節作り文化が発展した要因は、大きく2つあります。1つは近海にある優れた漁場です。黒潮が土佐清水に接近すると、陸棚斜面を駆け上がる湧昇流が生じて太陽光が届く海面付近に豊かな栄養塩を運び、土佐清水近海に好漁場が形成されます。2つ目は、海路の存在です。黒潮が足摺岬、室戸岬、紀伊半島といった太平洋に突き出す岬にぶつかると、逆潮（反転流）と呼ばれる岸に沿って西方向に流れる海流が生じます。鰹漁や鰹節作りの先進地であった紀伊半島の漁師が、これらの海流を利用して足摺半島近海へ進出した際に、鰹の好漁場を発見し、節作りの製法を土佐清水に伝えまし

た。このことが、土佐清水の漁業に大きな発展をもたらすことになりました。また黒潮や逆潮は太平洋での航海にも利用され廻船業が発達することとなり、さらに内陸部でも、節を燻すのに用いる薪（ボサ）や、輸出用の木炭の生産のため、林業が営まれてきました。

清水さばを育む海底地形

近年では、ゴマサバ（ブランド名：土佐の清水さば）が新たな特産品となっています。回遊魚であるゴマサバは、黒潮流域で生まれ、夏の間は北上して三陸や北海道沖で成長し、冬～春になると産卵のために南下します。足摺半島沖はゴマサバの産卵海域であり、また成長して回遊しなくなった“瀬付きのサバ”の生息地でもあります。足摺半島沖の海底は、大地の隆起にともなって形成された断層や褶曲が数多く存在し、起伏にとんだ海底地形となっており、これが漁礁の役割をすることで、年中ゴマサバが漁獲できる好漁場となっています。

黒潮と大地が育むサンゴの海

さらに、土佐清水では、三崎層群が分布する竜串・見残し海岸において、波や海水中の塩による風化侵食作用によって奇勝奇岩が生み出され、江戸時代前期の遍路案内書に紹介されて以降、観光名所として知られるようになりました。さらに、風化侵食作用によって複雑な地形となっている竜串湾に暖かい黒潮が流れ込むことで、サンゴ類をはじめとする生物多様性の高い海域が形成され、ダイビングやグラスボート、そして、“里海”たる竜串湾の生物を中心に紹介する水族館などを楽しむため多くの人が訪れることとなりました。

自然災害と暮らし

大地と海との関係は、良いことばかりではありません。土佐清水のすぐ沖に存在する南海トラフで発生する大地震とそれにもなう大津波は、土佐清水に大きな被害を幾度も与えてきました。また、黒潮がもたらす温暖多雨な気候は豊かな植生を育むと同時に、洪水など水害も起こします。それでも先人たちは、伝承、地名、石碑などで教訓を後世に残しながら、海とともに暮らし続けてきました。

気候変動や、食料など様々な資源の不足、生物多様性の低下、自然災害の発生など様々な課題を抱える現在、地球の表面積の7割を占め、地球システムの基幹とも言える海のことをより理解し、利用の仕方を見直していく必要があります。土佐清水を訪れる人々には、変動帯という変化の激しい土地における海とともにある暮らしを楽しみながら体感してもらい、土佐清水の人々には、あたりまえにあるこれらの存在を再確認し、ジオパークを通じて、海との付き合い方を考える第一歩を踏み出してもらいたいと考えています。

2-3 ジオサイトの整理

土佐清水ジオパークにおいては、2022年3月現在、25のジオサイト（地質・地形）を選定しています。生物・生態学および文化的な価値が示され、併せてジオサイトと同様に教育的・ツーリズム的価値を有するものを「自然サイト」、「文化サイト」として位置づけ、それぞれ5カ所と4カ所選定しています。34カ所のサイトの特質、サイト位置図はサイトリスト及びサイトマップに整理します。

サイト名	概要
ジオサイト（地質・地形）	地質遺産の中から、保全の対象とするとの観点ともに、教育的価値（現地学習、巡検、学校教育への利用など）や、ツーリズム的価値（アクセスのしやすさ、景観の良さなど）を有するもの。
自然サイト・文化サイト	文化的、生物・生態学的価値が何らかのかたち（信頼性のある成果物や実績など）で示され、保全の対象とするとともに、教育的価値・ツーリズム的価値を有するもの。また、ジオストーリーとして、地質・地形サイトと関連させることができるもの。

3 土佐清水ジオパークの目的

ここでは、土佐清水の課題を整理し、ジオパークをもって目指すまちの姿を明確にし、ジオパーク推進に対する基本的な考え方を示します。

3-1 なぜジオパークを進めるのか

(1) 土佐清水をとりまく状況とジオパークを進める背景

土佐清水において最大の課題である過疎化や少子高齢化などの人口問題は、地域の活力の低下を招き、経済活動をはじめコミュニティの維持のほか自然景観の保全や地域文化の継承などに深刻な事態を招いています。

また、社会情勢や地球規模の環境問題などは地域社会にも大きな影響を与えており、将来にわたってよりよい社会を作っていくためには、地球規模の課題に対し、持続可能な開発目標（SDGs）の実践など、行政や民間企業、地域コミュニティ、そして個人などあらゆる段階で行動を起こすことが必要です。このような活動や行動の核としてジオパークを位置づけることで、一体的に持続可能なまちづくりを進めていきます。

・産業の状況

土佐清水市は、古くより鰹漁等の漁業が盛んな漁師町として栄えてきましたが、1955 年の国定公園の指定を契機に足摺・竜串地域を中心に観光開発が行われ、1972 年に国立公園となり、観光が地域の主要産業となりました。しかし、近年の観光ニーズや旅行スタイルの変化に伴い、観光客は次第に減少していきました。また、少子高齢化や人口流出によるまちの活力の低下に伴い、魅力ある観光地を維持させるための人材や資金といったリソースが不足し、施設の老朽化や景観の維持などが困難になっている事例なども見られます。また、観光業は 2020 年から続くコロナ禍や天候、国際情勢など外的要因に左右されやすい産業分野です。あらゆる状況下においても持続可能となるようなしなやかな態勢づくりが大切です。

また、近年は観光の再開もあり、賑わいを見せましたが、地域経済の持続性を考えると、周辺施設や体験メニューの充実や地場産品の販売など、来訪者の満足度向上や滞在時間の延長など地域への波及効果を高める施策が必要です。

これまで地域を発展させてきた漁業においては、担い手不足のほか、海域の環境変化や漁業資源の減少などの影響から漁獲が不安定な状況にあり、伝統産業である宗田節についてもこれらの要因から原魚の安定的な確保が難しくなっています。地域産業は、地域内のリソース不足といった要因だけでなく、地球環境や社会情勢の変化といったグローバルな要因にも大きな影響を受けています。

・地域資源の保全の状況

土佐清水には、特異な地質・地形、豊かな生態系、そして各地域に伝わる伝統文化などが残されています。しかし、それら地域資源の価値を評価し、啓発する博物館や郷土資料館といった施設がなく、体系的な情報の整理や発信が不十分であり、地域住民が自分たちの地域の価値について知る機会もあまり多くありませんでした。地域資源の価値の評価や情報整理が充分行われていないと、本来の価値を見極めた有効な活用が行われず、地域の活力の低下につながってきます。

地域資源の保全のためには地域の人たちの関わりが不可欠です。足摺岬のヤブツバキ林の再生や竜串湾のサンゴの保全、また、地域のお祭りなど伝統文化も地域住民の主体的な活動により維持されています。しかし、これらも産業同様に担い手不足が深刻な課題となっています。

このほか、大規模な開発なども、地質遺産をはじめとする自然景観や環境、住民の生活に大きな影響をもたらします。地域で大規模な開発が計画される際には、住民が自ら考え、関係者とともに地域にとって適切な開発の在り方を議論していくことが、地域資源の保全の観点からも求められています。

地域資源は土佐清水らしさをつくり出している「土佐清水アイデンティティ」の根源となるものであり、将来にわたって土佐清水らしさを残していくためにもその価値を知り、守り、活用する取り組みが必要不可欠です。

・自然災害等のリスクへの対応

土佐清水は毎年のように来襲する台風や近い将来必ず起こるといわれている南海トラフ地震への備えなど防災はとても重要な課題であり、自主防災組織や行政が連携し、対策が進められています。近年は、自然災害碑を活かした防災学習の実施や、地質や地形などジオパークの視点を踏まえた避難路の検討などもされており、防災分野でのジオパークの活用が進んでいます。現在、自然災害への対策は地域だけの問題ではなく、地球温暖化など環境の変化により災害のリスクが増大していることもあり、地球規模の視点でリスクを減らす取り組みも求められています。

このほか 2020 年から世界中で猛威をふるっている新型コロナウイルスのような感染症など、想定外の危機はいつどのように起こるかわかりません。このような危機に対応するためには、リスクを分散させることや様々な状況にしなやかに適応できる地域づくりが求められています。

（２）ジオパークを進める理由

ジオパークは、地球科学の視点から大地やそこに成立した生態系、その中で紡がれてきた地域固有の歴史や文化の価値を明らかにし、守り、活用することで、その地域らしさを将来に伝え、持続可能な発展を目指す包括的なプログラムです。これは、土佐清水の地域課題の

解決のためには、とても有効なものです。

前述したように土佐清水において、人口減少が最大の課題となっており、それにより、まちの活力や「土佐清水らしさ」が失われるかもしれないという状況にあります。そのためには、地域を支える「人」が重要なカギとなります。ジオパークの活動をする中で、育まれた人材は、地域や社会にとって大切な財産となるでしょう。また、国際的で総合的なプログラムであるジオパークは、複雑化し大規模化する課題と向き合い、さまざまな主体と連携して課題解決に取り組むことができる場です。「人」がその人らしく活躍しながら、ジオパークを活用しつつ課題解決を図っていくことで、新たな価値が生み出され、まちは輝きを増し、よりよい未来をつくり出すことができるはずです。私たちはこのような希望を込め、未来を創造する「人づくり」をジオパーク活動の柱とし、推進していきます。

3-2 土佐清水ジオパークの目的と理念

土佐清水においてジオパークに取り組む最大の目的は、黒潮の恵みに育まれた土佐清水の大地、そしてそこに育まれる私たちが愛するこのまちを未来に残し、よりよい未来を目指すことです。地域のよりよい未来の姿とは、その大地とそこに根付く自然、培われてきた歴史や文化、暮らしを守りながら、土佐清水らしく地域が輝く姿です。そのためには、「人」が重要な役割を担います。人口減少に歯止めがきかない中においては、「人口減少＝地域の活力の低下」にならないよう、人口に依存せず地域を活性化する方法が必要です。そのためには、地域を構成する「人」がその人らしく活躍し、自己や社会のよりよい未来のために行動していくことが大切です。

私たちは、ジオパーク活動を通じて、土佐清水の持つ価値を伝え、土佐清水アイデンティティの構築を図ることで、地域を大切に思う人を増やしていきます。そして、あらゆる観点から世界を見る目を持ち、地球科学的なスケールで思考し、地域づくりや社会の課題解決に取り組み、新たなステージへ押し上げていく「人」を育てていきます。そのような「人」をつくっていくことこそが、今を生きる私たちが未来のためにジオパークを通じて果たすべき使命です。

これを地域の皆さんと関係者がしっかりと共有するため、土佐清水ジオパークの理念とそれを実現するための「人づくり」の方針を定めます。

土佐清水ジオパークの理念

～自然の恵みと知恵を明日へつなぐ人づくり～

この地に暮らす私たちは、ジオパークを通じて大地、海、山、川、生き物、そして風土に根差した暮らしの価値を見つめなおし、その恵みに感謝しながら、土佐清水らしいまちの姿を未来に伝えていきます。足元を見つめ、土佐清水から地球を見つめ、地球から土佐清水を見つめ、一人ひとりが考え、未来のために行動していきます。やがて地域を支え、未来を作る「人」が育まれるように、私たちは、この地でジオパークを進めていきます。

土佐清水ジオパークによる人づくりの方針

地球科学を土台とした学び	ネットワークや交流による学び	土佐清水アイデンティティの構築
大地の遺産に触れることで、様々な時空間スケールが存在し、あらゆるものが相互に関係しあっていることを学びます。地球視点・地球規模で物事を考え、現在の地球が抱えている大規模で複雑な課題を自分事として捉え、解決に向けて活動に取り組める人を育てていきます。	研究者や専門家との連携、地域内での連携や世界中の人々との交流により、対話や議論の機会を創出します。様々な価値観や知識、背景を持つ他者と交流し、議論をすることで、問題意識を共有し、相互理解を深めたり、アイデアを生み出したりすることができる人を育てていきます。	自分たちの暮らす地域のことを知ったうえで、他の地域についても学び、そこに暮らす様々なライフスタイルや価値観を持つ人たちと交流します。自分たちの暮らす地域の特徴や価値を明確化し、土佐清水アイデンティティを育み、地域を愛し、地域のために行動できる人を育てていきます。

3-4 地域と住民とジオパークとのつながり

ジオパークは地域固有の文化を尊重し、讃えながら、ボトムアップにより、地域の皆さんが主導的に実施していくものです。ジオパークでは、地域の文化、コミュニティなどその土地のつながりの重要性を認め、地域の人々の知識や慣習などを取り組みに活かします。

現在、すでに取り組まれている環境保全や地域文化を守る活動、防災・減災活動や清掃活動などもジオパーク活動につながるもので、それらの活動に、地球科学的価値を付与することで、地域と大地のつながりは一層強固なものになります。また、ジオパークを通じて、“Think globally, act locally”（地球規模で考え、足元から行動する）を実践し、グローバルな課題解決を共に考え、地域から行動を起こすことで、地域の地道な活動は、内外に広がっていきます。活動の継続で得られた知見やノウハウをネットワークで幅広く共有することで、地域の取り組みが、人を変え、社会全体を変えていくものになるかもしれません。このように、住民の皆さんとともに活動を継続しながらその輪を広げ、そこから「人づくり」につなげていきたいと考えています。

今後、土佐清水ジオパーク推進協議会とその活動理念に共感し、活動を共に行う団体や企業などとパートナーシップを結び、さらに地域に活動を広げていく必要があります。

4 計画の体系

ジオパークを進めていくために必要な取組の方向性を示します。ジオパークの推進にあたっては、活動の核である地域の資源の保全と、その資源を活用し、地域の発展につなげることを一体的に行うことが大切です。したがって、ここで掲げる取組の方向性は、「保全」と「活用」の二つの視点から整理し、取組の方向性を示します。

4-1 土佐清水ジオパークの基本方針

ジオパークとは、人類共通の遺産である「大地の遺産」を教育や研究、そして、ジオツーリズム等で活用しながら守り、その価値を広く伝えることで、地域及び社会全体の持続可能な発展を目指すものです。土佐清水ジオパークでは、この考え方を踏まえ、たうえて、「人づくり」をジオパーク活動の柱と捉え、以下の方針を定めます。

それぞれの施策については、相互に補完し合いながら、切れ目なく一体的に進められるものです。土佐清水ジオパークでは、目的達成のため、以下の方針を掲げます。

自然の恵みと知恵を明日へつなぐ人づくり

- | | |
|----------------------------------|---------|
| ■ 土佐清水らしい自然や文化、暮らしを守る | 【保全】 |
| ■ 自分たちが暮らす地域と地球の価値を知り、人を育む | 【教育】 |
| ■ 地域資源を活用して、関係人口を増加させ、地域経済を循環させる | 【経済発展】 |
| ■ 住民が自信と誇りを持ってジオパーク活動を実践する | 【活気づくり】 |

■保全

「大地の遺産」をはじめとする地域資源の保全は、ジオパーク活動において核となる重要な取り組みです。地質的価値が認められる場所や、大地とのつながりの上に成り立っている生態系や文化的に重要な場所をサイトとして定め、保全を図ります。モニタリングや調査研究は、関係者との協働・連携をもって実施します。さらに、保全活動のための学びの機会を、住民の皆さんと共につくっていきます。

■活用

(1) 教育活動の推進

ジオパークにおける教育は、郷土愛を育むだけでなく、地球科学的な時間スケールを用いることで、多角的な視点や総合的な思考力・実践力を身に付け、よりよい未来を創造する力を育むものでもあります。学校での学習をはじめ、地域住民や来訪者などに土佐清水の自然や歴史・文化を楽しみながら学び、新たな気づきや価値観をもたらす機会を提供していきます。また、学びの機会の増大によって、互いに学び合い、そこから新たな価値や文化を創り

出していくことを目指します。

（２）地域経済の発展

地域資源を活用したジオパーク関連の商品開発やガイドツアー・体験メニューなどに高付加価値を付けることで、観光業や一次産業などの活性化を促すとともに、地域経済を循環させていきます。また、ジオパークに関連する経済活動は、環境や社会に配慮されたものでなくてはなりません。その価値観を多くの企業や団体、個人と共有し、地域を持続可能な形で発展させていきます。

（３）地域の活気づくり

地域資源の価値を知り、住民が自信と誇りを持ってジオパークに関する様々な活動を実践していくことで、住民主体のまちづくりを行い、地域に活気をつくり出します。また、研究者や専門家や日本ジオパークネットワーク等の多様な人材との交流や協働により、新たな価値を創造し、地域内外でジオパークの存在価値を高めていきます。

4-1 取組の体系

前章までに記した本計画の目的と理念、方針、土佐清水ジオパークの課題と取組の体系を示します。

3-4「住民の皆さんとジオパークとのつながり」で述べましたが、本計画において重視すべきは、住民の皆さんが主体的に実施する活動です。したがって、ここに示す体系においても、まず住民の皆さんが主体となる「保全」と「活用」に関する取組を掲げます。環境保全や地域文化を守る活動、防災・減災活動や清掃活動など、様々な取組がジオパークの目的につながっています。

目的

自然の恵みと知恵^{あす}を明日へつなぐ人づくり

理念

この地に暮らす私たちは、ジオパークを通じて大地、海、山、川、生き物、そして風土に根差した暮らしの価値を見つめなおし、その恵みに感謝しながら、土佐清水らしいまちの姿を未来に伝えていきます。足元を見つめ、土佐清水から地球を見つめ、地球から土佐清水を見つめ、一人ひとりが考え、未来のために行動していきます。やがて地域を支え、未来を作る「人」が育まれるように、私たちは、この地でジオパークを進めていきます。

方針

保全

ジオサイトおよび自然・文化サイトの保全を図ります。保全活動に必要なモニタリングや調査研究は関係者との協働・連携をもって実施し、住民や来訪者らが参加して学べる機会をつくります。

活用

教育活動の推進

ジオパークの学びや研究を通じて新たな気づきをもたらす機会を提供していきます。学び合いにより、新たな価値や文化をつくりだしていくことを目指します。

地域経済の発展

ジオパークを通じて、地域のブランディングを行います。サステイナブルな価値観を事業者等と共有し、地域経済が循環する仕組みをつくります。

地域の活気づくり

ジオパークを通じて、住民主体のまちづくりや多様な人材との交流・協働を進めます。地域に活気をつくり、地域内外でジオパークの存在価値を高めていきます。

以下に取り組みの体系を示します。具体的な数値目標や行動計画については、「前期アクションプラン」に記載します。

■保全

大分類	中分類	小分類
保全	1 サイトの管理	1-1 保全管理計画の策定
		1-2 利用ルールの明確化と周知
		1-3 データベースの整理
		1-4 サイトの情報発信
	2 モニタリング	2-1 定期的なモニタリングとデータの蓄積
		2-2 モニタリング成果の報告・発表
	3 住民主体の保全活動	3-1 学校や住民と連携したモニタリング
		3-2 住民主体の保全活動
	4 調査研究	4-1 大学や研究機関との連携強化
		4-2 調査研究に関わる資料の収集および活用
		4-3 調査研究活動に関わる支援
	5 無形文化財の保全	5-1 調査・目録作成
		5-2 無形文化遺産の啓発

■教育

大分類	中分類	小分類
教育	1 調査研究成果の普及	1-1 研究成果のアウトリーチ
		1-2 ジオパークに関する理解
	2 学校教育との連携	2-1 学校での学習機会の拡充
		2-2 教員向け研修の継続と拡充
	3 防災学習の推進	3-1 自然災害碑や防災施設等を活用した学習
		3-2 防災・減災を伝える人材育成

■経済発展

大分類	中分類	小分類
経済発展	1 ジオツーリズムの推進	1-1 ジオガイド養成
		1-2 ジオツアーの販売
		1-3 誰もが楽しめるツーリズムの推進
		1-4 事業者との連携
	2 環境整備	2-1 表示物などによる可視性の確保
		2-2 サイト周辺の環境整備
		2-3 アクセスルートの整備
		2-4 エリア玄関口での可視性の確保
	4 持続可能な経済発展	3-1 一次産業分野との連携
		3-2 ジオストーリーを活用したブランディング・商品開発
		3-3 地域に根差した食文化の発信

■活気づくり

大分類	中分類	小分類
活気づくり	1 広報広聴・ボトムアップ	1-1 情報発信
		1-2 講演会やイベントの実施
		1-3 地域住民との意見交換
	2 拠点施設の充実	2-1 足摺宇和海国立公園との連携によるジオパーク展示等の磨き上げ
	3 パートナシップ・ネットワーク活動の推進	3-1 地域団体との連携促進
		3-2 行政との連携促進
		3-3 研究機関との連携促進
		3-4 民間企業との連携促進
		3-5 ジオパークネットワークへの参画
	4 地球にやさしいまちづくり	4-1 地域内でのごみの削減、リサイクルの推進
		4-3 生物多様性への理解を深める
	5 組織の持続可能な運営	5-1 組織のあり方の検討
		5-2 予算の確保
		5-3 人材の確保と育成
		5-4 ジェンダーバランス・多様性の確保

5 計画を進めるために

本計画の実効性を高めるため、ジオパークの推進体制を記すとともに、協働・連携する主体の役割を明確にします。また、各取組のアクションプランとして関わる主体および時期を示し、計画の可視化を図ります。

5-1 ジオパークの推進体制

(1) 協議会

土佐清水ジオパークは、現在、2015年2月に設立された「土佐清水ジオパーク推進協議会」が中心となって進めています。現在、土佐清水市および市内の教育、観光、住民組織など39の関係機関や民間団体などによって構成され、事業計画や予算計画など、重要な案件を決定する「総会」が開催されています。

協議会の組織は、会長・部会長らで構成され、ジオパーク推進に関する企画・運営事項を協議する「役員会」のほか、4つの「専門部会」が協議会の中に、「顧問」と「学術アドバイザー」「協力機関」が外部に位置づけられています。

(2) 専門部会

協議会には、取組に関してテーマに沿った内容を協議・実行する以下の4つの部会が位置づけられています。

- ◇計画・保全部会
- ◇教育・啓発部会
- ◇観光・ビジネス部会
- ◇地域コミュニティ部会

各部会は表に示す団体で構成され、協議会の様々な取組に関して各部会の設置テーマに沿った内容の協議・実行の中心的な役割を担っています。本計画に記した取組の実践に向けて各部会、そして協議会会員が主体的に取組んでいきます。

(3) 顧問、学術アドバイザーおよび協力機関

協議会においては、運営および活動を専門的な立場から様々なかたちでサポートいただく「顧問」、学術アドバイザーおよび「協力機関」を位置づけています。地域資源に関する学術的な助言や、サイト保全およびガイド養成に関するアドバイス、講座やフィールドワークの講師などについて協力いただいています。

5-2 各主体の役割

本計画の推進にあたっては、協議会が中心となって進めていくこととなりますが、協議会だけでやることは決して多くありません。協議会の構成メンバーを含めた、住民の皆さん、ジオガイド、事業者、教育・研究機関、NPO 等各種団体、行政など各主体の協働・連携こそが計画の大きな推進力となるため、関わる各主体の役割を明確にしておきます。

（１）住民の役割

土佐清水ジオパークの主役は住民の皆さんです。住民の皆さんは、自らジオパークや地域資源に対して興味と探求心を持ち、ジオパークや社会の持続可能性への意識を高めていきます。様々な勉強会や講演会等のイベントやジオツアーなどに積極的に参加することで、自分たちが暮らす土佐清水のことをより深く知り、「土佐清水アイデンティティ」を育みます。それによって地域資源を大切に思う気持ちが生まれ、ガイド研修や保全活動、商品の開発など、自分にもできることを考え、地域や社会の持続可能な発展に寄与していきます。

（２）ジオガイドの役割

ジオガイドの皆さんは、ジオパークを最前線で支えているといっても過言ではありません。地域内外の人たちに土佐清水のジオパークとしての魅力をしっかりと伝え、土佐清水のファンを増やしていく役割を担います。したがって、より満足度の高いガイドを実施することはもちろん、地域の様々なイベントなどにも積極的に参加し、自らの知見を深めていきます。そして、将来的にはある程度の収入を得てガイドとして自立していくことを目指します。とはいえ、無理なく自分が楽しんでやること、これが最も大切です。

（３）事業者の役割

特に一次産業従事者や観光関連事業者は、ジオパークの推進を大きなチャンスと捉え、自らの事業とジオパークのつながりを見つけ、事業を展開していきます。そのためにはジオパークに関する勉強会などに積極的に参加し、事業への活かし方を考えていきます。ジオストーリーに沿った商品の開発やツアーの造成、SDGs の推進などサステナビリティに配慮した事業を実践していきます。土佐清水のファンづくりに貢献するとともに、経済的、社会的な発展を担っていきます。

（４）教育機関の役割

学校などの教育機関は、ジオパークに関する学習を積極的に取り入れ、実践的に学んでいく機会をつくります。子どもたちが将来的に社会で活躍することを念頭に置き、地球科学的なスケールでの思考力を育てていきます。「土佐清水アイデンティティ」の元となる地域の自然や文化・歴史的な価値を伝え、地域を誇りに思い、未来をつくりだせる人材を育成します。先生方も学習会やジオツアーなどに参加し、自らジオパークに対する知見を深めていきます。

（５）NPO 等各種団体の役割

NPO 等各種団体は、それぞれのミッションにジオパークとの関わりをはじめ、SDGs に係る取組を見出して協力していきます。とりわけ環境保全や観光振興、地域コミュニティや社会福祉にかかわる活動はジオパークとの関わりは深く、ジオパークを活用することで相乗的な効果を生み出すものと考えられます。イベントや学習会の開催、PR 活動など土佐清水ジオパークの魅力を高める様々な活動を実践していきます。

（６）研究機関の役割

研究機関は協議会と連携してジオパークに係る調査研究を実施し、学術情報の充実や学術的な価値の向上を図ります。研究成果は、論文や学会発表のほか、地元での講演会や市報への寄稿など、幅広く公開し、住民の皆さんをはじめとする各主体にその重要性を広く普及させていきます。

（７）行政の役割

国や県、土佐清水市は、土佐清水ジオパークの推進に向けて、ジオパークに係る環境保全や施設・情報整備、その他関連事業などについて、行政間および他の主体と連携しながら施策の展開を図ります。また、本計画の取組に対する財政的な支援も含め、ジオパーク推進全体のバックアップを担っていきます。

（８）協議会の役割

協議会は、土佐清水ジオパークの中心組織として事務局および４つの部会がそれぞれ進めるべき取組について統括します。

① 事務局

協議会事務局は、協議会全体の円滑な運営管理、様々な取組の進捗管理を行うとともに、自ら具体的な取組を企画立案し、部会や他の主体と協働・連携して実行します。また、周辺地域および他地域ジオパークとの交流の促進を図ります。

② 計画・保全部会

計画・保全部会は、本計画をはじめとする各種計画の策定、組織運営、自然・文化遺産などの保全および維持管理、メンテナンスを担当します。

③ 教育・啓発部会

教育・啓発部会は、各種講演会やフィールドワークの実施、学校との連携や教材や学習プログラムの作成などを担当します。また、調査研究活動にも携わっていきます。

④ 観光・ビジネス部会

観光・ビジネス部会は、ジオガイドの養成をはじめ、ジオツアーの企画・支援などを担当します。また、商品開発や販売、マーケティングのほか、看板やパンフレットなどの作成に

取り組みます。

⑤ 地域コミュニティ部会

地域コミュニティ部会は、土佐清水ジオパークの周知活動やイベント参加・協力、地域資源を活かした活動など地域住民が主体となった活動に取り組みます。

5-3 アクションプラン

本計画に記した各取組について、その可視性を高めるため、実施主体と実施時期を明確にしたアクションプランを示します。協議会は、本計画を統括し各取組の進捗について把握していきますが、取組のより具体的な内容については実施主体において検討し、協議会と情報を共有し進めていくこととします。

また、協議会では、年度ごとにアクションプランの進捗状況を把握し、評価を行い、必要に応じて取り組みの見直しなどを行います。